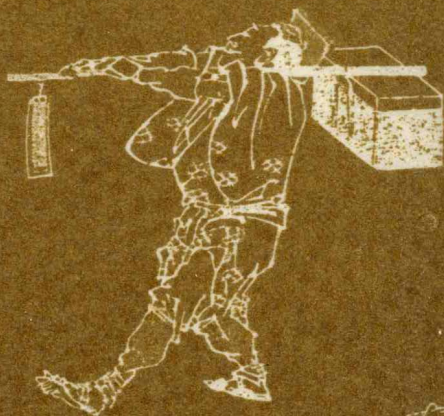


川柳平安人物史

原
桐
齋



川柳平安人物史

白地社

著者略歴

原 桐斎(はら とうさい)〔本名 實〕

大阪大学 法・経学部卒業 (S.30年)

阪大万葉友の会 代表幹事

古典文学研究家

和歌雑学の会 ^{サロニール}茶論留詩句 主宰

高島屋ローズカレッジ (西宮・堺)

近鉄アカデミア (なんば)

堺市教育委員会成人学校

大阪社会保険センター、等 講師

川柳平安人物史

一九九〇年十一月一日 発行

著 者 原 桐 斎

発行者 土 岡 忍

発行所 白 地 社

〒六〇〇 京都市下京区綾小路通岩上角 飯田ビル2F
電話(075) 八二一―五五八七
振替 京都 二―三四三六七

定価はカバーに表示してあります
落・乱丁本はお取りかえいたします
創栄図書印刷 修明社製本所

目 次

○数字は『百人一首』の番号

空海	11	藤原行成	118
喜撰法師 ⑧	19	藤原実方 ⑤1	119
小野小町 ⑨	22	和泉式部 ⑤6	121
蟬丸 ⑩	45	紫式部・(『源氏物語』) ⑤7	123
小野篁 ⑪	48	源頼光	148
僧正遍昭 ⑫	50	袴垂保輔	151
在原業平・(『伊勢物語』) ⑬7	57	小式部内侍 ⑥0	153
菅原道真・藤原時平 ⑭4	78	清少納言 ⑥2	156
凡河内躬恒 ⑮9	103	能因法師 ⑥9	160
壬生忠岑 ⑯0	104	良暹法師 ⑦0	166
紀貫之 ⑰5	106	「前九年・後三年」	169
小野道風	113	源頼政	177
紀時文	114	平清盛・平重盛	193
壬生忠見 ⑱・平兼盛 ⑲0	115	西行法師 ⑧6	209

常盤御前	227
平 忠度	230
「保元の乱」・源 為朝	237
「平治の乱」	245
源 頼朝	250
曾我兄弟	262
斎藤実盛	277
木曾義仲	281
巴 御前	286
平 敦盛・熊谷直実	288
源 義経・弁 慶	293
佐野源左衛門	317

——「その他の『百人一首』の人々」

天智天皇 ①	331
持統天皇 ②	332
柿本人麻呂 ③	333
山部赤人 ④	336
猿丸太夫 ⑤	337
大伴家持 ⑥	339
安倍仲磨 ⑦	341
陽 成院 ⑬	342
河原左大臣 ⑭	344
光孝天皇 ⑮	346
中納言行平 ⑯	347
藤原敏行朝臣 ⑱	351
伊 勢 ⑲	352

元良親王	②①	354
素性法師	②①	355
文屋康秀	②②・朝康 ③⑦	356
大江千里	②③	357
三条右大臣	②⑤	358
貞信公	②⑥	359
中納言兼輔	②⑦	360
源宗于朝臣	②⑧	361
坂上是則	③①	361
春道列樹	③②	363
紀友則	③③	364
藤原興風	③④	366
清原深養父	③⑥	367
右近	③⑧	368

源等	③⑨	369
清原元輔	④②	369
權中納言敦忠	④③	370
中納言朝忠	④④	372
謙徳公	④⑤	373
曾根好忠	④⑥	374
惠慶法師	④⑦	375
源重之	④⑧	376
大中臣能宣朝臣	④⑨	378
藤原義孝	⑤①	381
藤原道信朝臣	⑤②	382
右大將道綱母	⑤③	383
儀同三司母	⑤④	384
大納言公任	⑤⑤	386

大式三位	58	388	法性寺入道前関白太政大臣	76	412
赤染衛門	59	389	崇徳院	77	414
伊勢大輔	61	391	源 兼昌	78	415
左京大夫道雅	63	395	左京大夫顯輔	79	417
権中納言定頼	64	396	待賢門院堀河	80	419
相 模	65	398	後徳大寺左大臣	81	421
前大僧正行尊	66	401	道因法師	82	426
周防内侍	67	402	皇太后宮大夫俊成	83	434
三 条 院	68	403	藤原清輔朝臣	84	438
大納言経信	71	404	俊恵法師	85	439
祐子内親王家紀伊	72	405	寂蓮法師	87	440
権中納言匡房	73	407	皇嘉門院別当	88	441
源俊頼朝臣	74	408	式子内親王	89	442
藤原基俊	75	410	殷富門院大輔	90	445

後京極攝政前太政大臣	⑨①	447
二條院讃岐	⑨②	448
鎌倉右大臣	⑨③	450
参議雅經	⑨④	453
前大僧正慈円	⑨⑤	456
入道前太政大臣	⑨⑥	458
権中納言定家	⑨⑦	459
從二位家隆	⑨⑧	464
後鳥羽院	⑨⑨	467
順徳院	⑩⑩	470
跋		473
黒柳朝		

本書においては、川柳の真意にそつて、読み物としての味をそこなわないようにするために、古川柳の出典を省略したり、場面場面によつて旧かな使いを新かな使いに改めるなど、あえて表記の使い分けをしています。

なお、これは人名別に雑誌に連載して書き継いだために、人物の関わりの中でどうしても重複を余儀なくされました。したがつて一冊に纏めるにあたつて、筋の展開上、その重複の部分を削除することが難しく、あえてそのままにしたことを、ご了承ください。

川柳平安人物史

空海

空海（七七四―八三五）は讃岐の人で、『三教指帰』（空海の処女作、仏教の真理と密教至上論を段階的思想批判の形で説いた物語。始めに儒教を紹介し、次にこれを道教の立場から批判し、仏教の立場からさらに道教批判を加え、仏教の真理がもつともすぐれていることを戯曲風に描いた）（日本の古典名著）を著した。ときに二十四歳であった。延暦二十三年（八〇四）、最澄（七六七―八二二）と共に入唐して真言の奥義をきわめ、二年後に帰朝して、高野山に金剛峰寺を建て、真言宗の開祖となる。

唐に在る時、憲宗帝に書を命ぜられた折、空海は左右の手足と口に筆を持つて、壁に向かって同時にその五筆を振るつたので、世に五筆上人と称せられた。空海は嵯峨天皇、橘逸勢と共に、わが国における三人の能筆家としても有名である。

・名筆は三人五筆一人なり

・三筆のうちに五筆の名は高し

・三筆の一人五筆に得手があり

弘法の筆に関しては「弘法筆を選ばず」などと諺にも知られているが、投げ筆の故事も有名である。大内裡南面の正門応天門の額の文字を、一点書きおとしたのを人に指摘されて、下から筆を投げ上げてその点を書き加えたというのである。勅命で書いたはずの皇居の額の文字であり、彫刻されているはずのものであつて、このようなことは常識的に考えても作り話だと思われるが、「弘法も筆の誤り」としてよく知られている。

・弘法も一度は筆で恥をかき

・力まかせに弘法は筆を投げ

・弘法も点を打たれて点を打ち

以後、難点を指摘されることはなかった。

・力を見せた投げ筆の額の点

・其の後は投げ筆の打ち手なし

・凡慮なら頭掻くとこ筆を投げ

・独鉗（どくかん）から見ればいろはと筆を投げ

空海は高野山で独鈷を搜したといわれる。それに比すれば、筆を投げて一点加えるぐらいは初歩的な軽なことだったのか。

独鈷のついでに……。昔は胎児の形を仏具にたとえていたようだ。『懐胎十月図解』などに、「初月の形錫杖、二月目独鈷、三月目三鈷、四月目五鈷、五月目胎児初めて形あり」とあつて、

・ 仲条も仏具のうちはこはされず

(仲条は中条流女医が転じて、墮胎専門医のこと)。

従つて、五カ月までは手術が出来なかつた。

・ 陰陽のふいごで独鈷出来るなり

陰陽が合体して子供が出来る。

・ 朔日で腹の独鈷も水の印

・ 大黒の独鈷に和尚水の印

水の印は、胎児を水に流すこと。朔日は朔日丸つぎとまるという月水(経水)早流しと銘うった避妊兼墮胎用丸薬。これを毎月1日に服用していると経水が止まることがない、すなわち、妊娠の憂いがないとされた。

・ みそか事あるで朔日売れること

・ 日を吞んで月を流すは恋の闇

日は朔日丸、月は月のものの例えである。みそかは闇夜ゆえ、その闇夜のようなうしろ暗い行為をさしている。ひそかにも通じる。

・ みそか事朔日丸であかるくし

・ 朔日を当てとは後家の不覚なり

そんなにあてにならなかつたのだ。

・ 持薬さと朔日丸を後家はのみ

後家さんが避妊薬を常時持っているのである。

・ 朔日で払うは月のとどこおり

支払いがとどこおつて、翌月朔日に払うというのが表向きの意味だが、真実は、月のものが止まつて朔日丸で何とかしようというのである。本当の意味をうまくそらしているところがにくい。

・ 月を見る頃にはすすき土手に生え

といったたぐいの句も同様である。

・ 朔日をやめて十五夜腹にみち

朔日と十五日は共に物日であつた。十五夜は満月である。朔日丸をやめた途端に腹が満月になつたというのだ。

・ 朔日丸で松茸の毒を消し

・朔日を丸めて月をおん流し

・朔日丸通ひお針がすすみに来

後家さんが妊娠したのであろうか。

・霜月の朔日丸は茶屋で飲み

霜月(十一月)は顔見世狂言がある(向こう一年間の座附役者の披露をした名ごりが、現在十二月の京の南座の顔見世歌舞伎である)。そのため、中には初日の前夜からつめかけて、茶屋で幕あきを待つ者もいた。そこで朔日丸を飲んだのだ。

「いろは」四十八文字は弘法大師の創始したものといわれている。謡曲にも、東寺において、弘法の霊から筆道などの物語を聞くという筋の「伊呂波」があり、狂言にも「以呂波」があつて、習いごとをする子供がしつこく大人の真似をすることになっているようだが、あまり見かけない。

・仏作の世に行きとどくいろは也

いろは四十八文字でどんな言葉も出来るから、

・五十字に足らず万字の用に足り

「いろは」は「仮名手本忠臣蔵」でも有名である。赤穂浪士討ち入りの時に大石以下「い」、「ろ」、「は」と

しるしをつけたというのである。

・弘法の作一字づつ家老分け

また「いろは」の三組に分けたともいわれる。

・大石を土台にいろは組み立てる

・大石を土台に忠臣蔵を建て

・いろは仮名名も高輪に残る石

・三年でいろはを上げる本望さ

仇討ちに三年を要した。

・初手もいろ末もいろはの敵討

忠臣蔵の発端は高師直が、塩谷判官の御台所、顔世御前に横恋慕したことにはじまる。

・いざまづと和尚いろはへ粥を出し

最期の泉岳寺で、お粥をふるまったことをさしている。

尚いろはうたについては、現在では弘法大師でなく、

柿本人麻呂がその獄中で暗号文として作ったという

説が知られている。

いろは茶屋は上野谷中の感応寺門前の茶屋町にあつた私娼窟。その名前は(1)四十八文であつたから (2)四十七、八軒あつたから (3)「いろは」と書いた暖簾をかけていたから……などであるが、いずれも不明であ

る。いろは茶屋はもっぱら上野東叡山三十一坊の坊主が主な客であつた。坊主は頭が丸い。

- ・丸いのを専らとするいろは茶屋

- ・いろは茶屋蝸がとれねばしけの内

たこ坊主をつかまえそこねるとしけるのだ。

- ・腕づくで客を生捕るいろは茶屋

- ・御自身に出ては引張るいろは茶屋

本人が出て客をひっぱるのだ。

- ・うろつくとやにはいろは捕へる

- ・いろは茶屋うみの出る手で捕へる

- ・花が散るよしなよしなというは茶屋

上野の花見帰りの客が、谷中で女につかまつた。花には鼻が掛かっている？ 昔はこういう所で男性が遊ぶと「鼻がおちる」と言われた。危ない。

- ・武士はいや町人好かぬいろは茶屋

- ・いろは茶屋吉三ぐらゐのはまるとこ

八百屋お七の恋人、吉三程度の坊主が行くところであるが、

- ・たまさかに野郎も入るいろは茶屋

俗人が混じることもある。

・いろは茶屋にて女郎を買ひ習ひ
そして身分が上になると、

- ・いろはから京町へゆく上達さ

京町は吉原五丁町の一つ。いろはは四十七文字の末が「京」になつてゐるのと掛かる。

- ・四十七軒ありそうないろは茶屋

いろは茶屋に近い感応寺は、富籤を売り出したことでも知られてゐる。

- ・もう突くか見てこいといふいろは茶屋

富つきが始まる頃かと気がかり。

- ・富の札買つてとねだるいろは茶屋

川柳にはこうした関係の句は多いが、弘法さまを題にしては少し気がひけるから、いま一句でとどめる。

- ・留めるなよ仏がくるといろは茶屋

この場合の仏はお葬式のことである。坊主は葬式が大仕事だから、「留めないでくれ、葬式がある」というのだ。

八一六年、弘法大師が開いた真言宗の道場が、紀州の高野山である。かつては女人の登山を禁じた。

- ・花なればこそ高野にも女郎花^{おみなへし}